

新刊紹介

哲學概論 齋藤 响著

哲學が非常の折にも、自己の武器として本當に働いてくれるためには、頭でこなれてゐるばかりでなく、又心に於て讀まれ、身に於て讀まれてゐるばかりでなく、行に於て讀まれてゐなければならぬ。

「天地我と並び生じ我萬物と一なり」といふ如き自覺にしても、それが生活實踐と綿密風を通さざる底の自覺即無我の自覺の無名眞人の活動にまで徹底されるのでなければ、所謂東洋的の無主義の觀照寂靜に墮し、大和に非ずして妥協中和の羸劣に落ちるの外ない。ミクロ・コスモス即マクロ・コスモスの深い自覺に立ち、文化批判と歴史創造の熱意に溢れて東洋古典への批判的復歸——ネオ・スピノチスムス——を實踐するもの、私の知る限り、齋藤响氏の外にない。最近の力作『哲學概論』はかゝる努力の流露であり、概論としての制限にも拘らず、そこに藏された原理や精神は深く人々を動かさずには措かぬ。普ねく推讃して欲まぬ所以である。

私は今、かゝる東洋古典への批判的復歸が、現下の客觀的情況に關聯しいかなる動向役割をもつかを問はぬ。六〇〇頁に垂々とする本書の豊かな内容を一々紹介する餘裕をも持たぬ。私

に許されたことは、本書を貫くと思はれる指導原理即ち命令律・自己定律の原理・同一性の原理を、私の理解に於て、語り紹介するにある。

一體、ユギトではなく、ホモ・ユギタットの立場に於て成立すると考へられる現實把握としての創造的活動たる「個體的並に超個體的人間行動」はいかにして理解せられるか。個體の自由なる創造的活動は世界の對象の把握を拒否する。個體の創造に命令する「現實在」としての世界は有ではなくして無であり、有指不至……無指則皆至、底の虚無であり、理論的體系化に却て根柢となる「未済の卦」に外ならぬ。かゝる現實在の絶對否定的行動的限定が個體の創造に於ける未來的決定として世界の命令に外ならぬ。かゝる世界の一義的命令決定なくして個體の現實的創造はありうべきでなく、世界の客觀的決定なくしては、創造も主觀的意欲的たらざるをえぬ。しかして創造なくして個體はいかにして自己を定立しえようか。命令律の根源的意味はこゝにあるのであり、至上命令的なるかゝる原理が自己定立の原理と深く連らなる所以である。それ故に、若しかゝる原理に即して存在の「客觀的自同性」(永遠性)といふことがいはれるならば、その意味する自同性とは最も根源的なるものとして把握せらるべきであつて、形式論理の同一律はいふ迄もなく、辨證法を貫く純粹自己同一性の立場をも超えるものといはねばならぬ。逆にいへば、辨證法そのものをも成立せしめる根源としての虚無からの創造たる世界の命令的定立的同一が自同性に外ならぬ

のであつて、若し辨證法がかゝる自己の根柢を忘れてその地位を僭するときは、假象の論理に終らざるをえぬ如きものである。それは辨證法の絶対の否定といふ意味を有し、近代の自我狂はいふに及ばず、凡ゆる種類の生の自己決定を絶対否定する否定の肯定に非ざる眞實無我の不行として働く究極的存在原理に外ならぬ。自然必然性の相として觀照せられた「永遠の相」ではなく、永遠が主體的に把握せられて世界の因果必然性が客觀的命令として私を未來的に限定する永遠の相の下に於ける創造的存在原理に外ならぬ。「コスモス」といはれ、我々が今それを取り返し、それを住家とせねばならぬ世界は、かゝる原理的世界をいふに外ならぬ。文化批判はこゝに根差し、歴史はこゝから新たとなり、論理學は姿を變へねばならぬ。仄聞すれば氏は今歴史の問題に深く思索を潛められるといふ。所期すべきものが多い。

併し翻つて考へるならば、個體の創造活動に命令する世界の客觀的決定が、客觀的として一義的命令たる所以は、個の自己矛盾の極地に於てこれを否定的に肯定する絶対否定性のみならず、絶対否定的他者性を有するにある。現實在が虚無からの創造として、凡ゆる生の自己決定を否定してその底から働きうるのは絶対否定的他者決定として始めてできうることなのである。果して然らば、それはいかに深く解せられようと同一性の原理をはみ出し、「同一性處理」を拒否するものといはねばならぬ。更に立入つていへば、かく現實在が虚無創造として主體

的に把握せられうるのは、それが特殊の矛盾闘争に即する生の自己矛盾の極地に於ける個の飛躍的實踐に於て見られるものなるが故である。命賭けの飛躍なき主體的把握とは、尙未だ自己否定の自己肯定たる道德的行爲の域を脱せぬ。飛躍は併し自己矛盾の上にある。虚無の主體的把握が眞の自己矛盾ならぬ反對・對立を槓杆とする辨證法の一度の否定たる所以である。對立が見られるのでなく、自己矛盾が主體的に把握せられるならば、個の命賭けの飛躍として虚無の絶対否定的他者決定に即するのである。存在の定立、具體的なる永遠性の意味はこの外にはない。果して然らば、いかにして尙同一律を維持することができるか。本書が命令律を宣揚し無からの創造を説きながら、尙 *something* なものを感じしめ、尙普遍主義に墮する危険なきかの感を抱かしめるのはかゝる理由によるであらう。東洋古典への批判的復歸・新スピノザ主義の意義と制限とはこゝにあるのではないか。コスモスの清澄世界は、かくして最も深く私を魅するものであるが、それが同一性原理を基軸とする限り、矛盾・飛躍の焔は永くそこに私を懸はしめないのである。

然りとはいへ、先にも一言せる如く、私の云ふところは私自身の現在有する特殊な視角から、私の理解に任せて、任意に本書の根本概念を抽出しそれに自由なる解釋を興へたものである。著者にたいする不遜の譏りは免れぬ。讀者はこれに依て本書の高い學問的價值を少しでも見誤られざることを冀ふのである。(内田老鶴圃書店刊行價二・五〇 篋 實)